

教育の原点への回帰

～震災の教訓を未来の宝に～

地域の
特色ある
活動

熊本県益城町教育委員会

1 はじめに

「平成 28 年 4 月 16 日未明、震度 7 の本震で、前震発生から対策本部にいた全員が、外の駐車場へ飛び出した。駐車場に机を並べ、対策本部はまた動き出した。固定電話が使えない中、携帯、スマホだけが頼りである。救助要請があちこちから届くが、自衛隊、消防、警察等への指揮系統もできておらず、行き当たりばったりの活動が続いた。避難場所にどれくらいの人がいるかも全く分からない。心肺停止の方の報告が届く。遺体安置所をどこにするか……次々と判断がもとめられる。……（中略）……

5 月 9 日学校再開の日。児童生徒 3122 名中、2902 名登校。出席率 93%。本当にうれしかった。『みんな学校再開を待っていたんだ』とつくづく思った。給食のこと、通学路のこと、避難所との共存、授業の遅れを取り戻すこと、子どもの心のケアのことなど課題は山積だが、みんなの努力でここまでたどり着いたのは間違いのない。これからが勝負だ。……」（震災当時の前森永教育長の手記の一部から）



2 震災から学んだこと

昨年の二度にわたる熊本地震では、益城町内で 40 名の方が亡くなり、多くの家屋が被災しました。また、町内の学校施設や公共施設も甚大な被害を受けました。今回、実際に震度 7 という地震を二度も体験し、改めて次のことを強く感じました。

- (1) 教職員や児童生徒に「非常時にどう判断し行動するか」。いわゆる自らの命を自ら守る実践的な判断力・行動力を育成すること。
- (2) 日常の学校生活において、教職員そして児童生徒が、「非常時にその危機を回避し、自分の命を守ることを意識した学習や訓練」を日常的かつ継続的に取り組むこと。
- (3) 非常時に「生きて働く力」は、知識や理屈ではなく、体験や経験を通じて身に付いた力（知恵）のみであり、今後、非常時にも「生きて働く実効性のある教育実践」をどのように展開するのが重要な課題であること。

震災を通じて学んだこのような観点から現在の学校教育活動を見直し、震災の学びを今後の教育活動に生かす取組を町全体で推進していきたいと考えます。

3 震災の学びを今後に生かす取組

(1) 防災・減災教育及び合同避難訓練の実施

危機管理課と協議し、災害対応力を向上させる教育プログラムを作成し、学習会を実施することで児童生徒の災害対応能力を向上させる教育を実施します。また、防災減災プログラムの一環として、地域と連携して避難訓練を行い、非常時における実践的な災害対応能力を育成します。

(2) 震災遺構の保存と活用への取組

震災遺構は、平成 29 年 4 月 21 日時点で 29 件あります。この保存については、復旧・復興に影響のない範囲で、関係者と同意が得られたものについては現状保存、困難なものについては写真や図面等の記録による保存を検討しています。特に、布田川断層の杉



堂地区にある潮井神社、谷川地区の民家内の地表断層、堂園地区の畑の地表断層については、町指定文化財（天然記念物）として指定しています。この3地区については、現在、国指定文化財（天然記念物）への指定を目指しているところです。今後は、このような震災遺構を環境教材として活用するとともに、これらを活用した防災・減災教育を構築し、全国の皆様方にも発信していく予定です。

(3)「地震火山子どもサマースクール」の開催

平成29年8月9日～10日に、県内では初めて「地震火山子どもサマースクール」が益城町で開催されました。このサマースクールは、地震で被災した益城町の子供たちが、地震や火山の仕組みを学ぶものです。小学4年生から大学生までの約30人が参加しました。大学の研究者の説明を聞いた後、実際にフィールドワークを行い、益城町杉堂の潮井神社では地表に表出した断層を観察しました。また、粘土で作った火山模型を使い火砕流の実験にも取り組みました。2日目には、参加した子供たちが班別に追究したテーマについて、具体的な資料をもとに堂々と発表しました。2日間を通じて、子供たちは身近な益城町の地形と火山や地震の関係を具体的に学び、そのメカニズムを学習することができました。

*サマースクールは、阪神淡路大震災をきっかけに1999年から日本地震学会、日本火山学会が、2011年からは日本地質学会も加わって、毎年実施しています。



(4)「子ども議会」の開催

平成29年8月30日に「益城町子ども議会」を開催しました。昨年度は、震災のため実施できませんでした。今年度のテーマは

「私たちの住みたいまち」であり、町内5小学校と2中学校の各代表が参加して実施されました。子供たちの質問では、

- 地震で通学路が使用できず、バス通学になっているが、いつ復旧するのか。
 - 熊本地震を忘れず未来へつなげるために、町内に地震記念館を建設してほしい。
 - 私は今仮設住宅で暮らしている。今後、仮設住宅はどうなっていく予定であるか。
 - 益城町を住みたい街、魅力ある街にするためにどのような施策を展開するか。
- など、震災を経験した子供ならではの質問や今後の町の復旧・復興に対する鋭い質問が町行政に投げかけられました。今回の震災を契機として、今後ともさらに未来を担う子供たちの豊かな発想や感性を引き出し、それらを具現化できるようにスピード感を持って積極的に取り組んでいきたいと考えます。

4 むすびに

昨年の熊本地震以来、全国の皆様方には、物心両面にわたる多大なるご支援をいただき、心から感謝申し上げます。そのような全国各地からの心温まるご支援を受け、現在益城町では、復旧・復興に向けて、一步一步着実に取り組んでいるところです。

まだまだ、わが町には成すべき事柄が山積しておりますが、ピンチをチャンスにすべく、笑顔とやる気そしてあきらめない心を持って前進します。頑張れば、必ず道は開けてくると信じ、「できない理由」を語るより、「どうしたらできるか」を前向きに語り合いながら。

最後になりましたが、これまでの全国の皆様方のご支援に改めて感謝の意を表しますとともに、震災前の自然豊かで人情あふれる益城町の再生を目指し、また今回の震災の教訓を未来の宝となすべく努力することをお約束し、むすびの言葉とします。

教育長

酒井博範

